

安心して子供を乗せることができる、 それがボルボのセダン



時流に迎合せずボルボらしさを貫いたS60

『TRUE VOLVO』は、その系譜を紐解きながら、あらゆる角度からボルボの魅力を検証していくシリーズ企画だ。今回はラインナップのなかで中核モデルの重責を担い続けるミドルクラスセダン “S60” をご紹介しよう。

ボルボと言えばステーションワゴン。10年ほど前まではそんなイメージを抱く方が多かっただろう。たしかに当時は販売台数においてもステーションワゴンが圧倒的多数を誇っていた。しかしいまや“全方位型プレミアムブランド”としてのポジションをしっかりと定着させているのはご存じのとおり。その躍進のきっかけを作ったモデルが今回の主役となるミドルクラスセダンの S60 なのだ。



2001年にリリースされ、いまでも販売が続いているロングセラーモデルのS60。現在は2.4リッター直5NAユニット搭載モデルのクラシックのみが用意されているが、2007年モデルまではライトプレッシャーターボ版の2.4T/2.5Tとハイプレッシャーターボ版のT-5もラインナップに加わっていた。今年のデトロイト・モーターショーでは次世代S60を示唆するコンセプトカーが発表されて注目を集めている。

ボルボは創業当初から主にファミリーカー市場へ魅力的なモデルを投入して成長を遂げたブランドだ。特に80年代、ミニバンとともにステーションワゴンがファミリーカーの王道として支持されるようになったのが追い風になったのは言うまでもないだろう。同時にそれは「ファミリーのセダン離れ」の裏返しでもあった。さて90年代後半になると、各ブランドはミドルクラスセダンの生き残りをかけ、新たな開発コンセプトとして「スポーティ」という方向を選ぶ。そして2001年、S60が登場したわけだ。やはり4ドアスポーツクーペと称されるスポーティなボディデザインが特徴……、でもS60は加速力や硬めの足をウリにするライバルたちとはまったく異なる世界観を持つミドルクラスセダンだったのである。そう、ファミリーのためのセダンにこだわったのだ。加速力よりナチュラル感と扱いやすさを重視したエンジン、コーナーを攻めるためではなく長い距離を快適に移動

するための足、そして頑強なボディと剛性感など、スポーティな衣装をまとったが、走行感覚には“ボルボらしさ”という一本の筋が貫かれている。それはアマゾンや240/260シリーズから脈々と受け継がれてきたボルボ製セダンの系譜と言ってもいいだろう。果たしてS60は世界中で好調なセールスを記録、時流に迎合しない“こだわり”を市場は高く評価したのである。さて、そんなS60の魅力の根源になっているボルボらしさをじっくり検証していこう。

検証 その1 「エンジン」

デビュー当初からS60の基幹ユニットになっているのは自然吸気の2.4リッター直5(170ps/23.5mkg)だ。とにかく、ストップ・アンド・ゴーが続く街中でも、そして長距離を高速で移動するシーンにおいても、乗員の疲労を最低限に抑えてくれるファ

ミリーカーに相応しい“仕事人”と言えるだろう。加速力を優先して瞬発力を追求するライバルたちが多くなか、扱いやすくナチュラルで使う人を選ばないボルボ製の直5ユニットはいまや貴重な存在。この「いい道具」として使えることに徹する姿勢こそが“ボルボらしさ”なのだ。

検証 その2 「サスペンション」

いつの時代もボルボの足は乗り心地が最優先。もちろんS60にもこのコンセプトが貫かれている。いま、スポーツ性を高めるために硬い足を採用するのがミドルクラスセダンの主流だが、ボルボは決してぶれることはない。しっかりストロークして乗員に過度なストレスを与えないことに徹している。とにかくステアリングに軽く手を添え、S60で高速道路をドライブしていると快適そのもの。マルチリンクのリア・サスペンションがもたらす



重厚なフラットライドは世界のトップレベルにあると言っても過言ではない。後席に乗せた家族が快適に過ごせるためのサスペンション、これがボルボの足の系譜なのである。

検証 その3 「居住空間」

クーペ・スタイルのボディをまとうS60。ゆえに囲まれ感のあるスポーツカー的な室内空間を想像する方が多いだろう。ところが乗り込むと明るく開放的で後席にも十分なスペースが用意されていることに驚く。インパネのデザインも必要以上に飾り立てるのではなく機能性を重視するボルボ流が貫かれている。広大なトランクは家族旅行の大荷物も余裕で呑み込んでしまうし、後部座席背面が前方に倒れるトランクスルー機構も備わっていて長尺物の搭載が可能になるのもポイント。スタイリングによって実用性が犠牲になるなどボルボには許されないことなのだ。

検証 その4 「安全対策」

「安全に安心して走らせることのできるクルマ」、これは創業者が掲げたボルボの理念でもある。たとえば、直5ユニットを横置きにする最大の理由も衝突時のエンジンルームに有益なスペースを確保するため。とにかく安全性を基本にクルマを作る、これはボルボが決して曲げなかった信念でもあるのだ。デュアルモード&サイドエアバッグ、頭部側面衝突吸収エアバッグのインフレーターブルカーテン、スタビリティ&トラクションコントロール、死角情報提供システムなど、S60にも万全の対策がとられている。

いい道具は経済的

S60は峠道をかっ飛ばしてスリリングな感覚を味わうためのクルマではない。乗員にストレス与えないペースで、安全・快適なドラ

イブを楽しむために作られた正統派のセダンだ。いま、安心して子供を乗せることのできるコンフォート指向のミドルクラスセダンがどれほどあるだろう。S60の持つ価値は非常に高いと言える。

TEXT: 野田義彦

